家族を失った昭和20年10月5日

浜松市南区金折町　磯部 嵩夫

本稿は平成28年1月16日に金原明善生家記念館で開催された証言伝承会を紙面再現したものです。

証言伝承会で語る磯部嵩夫氏

私は昭和20年10月5日の天竜川堤防の決壊による水害で、母親と兄弟下から3人と家屋敷を失いました。15歳のときでした。現在では災害が起きれば消防、警察、自衛隊が装備を持って救助に来てくれますが、終戦当時の場合は、資材や機械道具、組織だった救助活動も無く、何も無い状況のなかで起きた水害でした。本日、こういった機会を通じて私の体験談が少しでも皆さまのお役に立てて頂ければ幸いです。

天竜川が増水している

10月5日のその日、私は風雨が強くなるということで、浜工（現在の浜松工業高校）の3年生でしたが、3時間で授業が終わり、自宅へ帰り、お昼を食べ終わったのが午後1時頃でした。町内の引継ぎ（伝言）があり、「天竜川がどんどん増水している。防空壕の跡が危ないから出てくれ。」という連絡があり、スコップを持って現場へ駆けつけました。この防空壕は、戦時中に兵隊が、水を防ぐ堤防に穴を掘ったもので、この水害は全くの人災だと思っています。堤防の中の防空壕の構造はクランク形状になっており、外側（堤内地）の住宅側と、内側（堤外地）河川敷の方に出入口がそれぞれあって、（堤外地）河川敷の出入口（河川内）には、私たちが子供の時からの空き屋敷がありました。その空き屋敷の西側の堤防との間に高さ2mくらいの石垣があって、その石垣あたりが河川敷側の出入口になっていました。

私たちは河川内の空き屋敷側の入口を塞ごうということで、堤防に生えている樹木の枝を切って穴に放り込んで小垣（石垣）の入口を埋めるという作業をしました。当時雨が降っている中で、その上から土をかけていましたが、枝の上から土をかけても、その土も砂混じりの土であるため、河川の水でどんどん溶けてくずれてしまいました。そのうちに天竜川の川筋が、今まで経験したことが無いような水量となり折からの大雨でどんどん攻めてきて（上昇し）、私たちの水防が間に合わないうちに、石垣の上を水が流れるようになり、ついに壕の入口から堤防の内へ流れ込み始めました。「これはもう駄目だ。枝や土だけでなく、畳がいいのではないか。」という声もありましたが、もうそれが間に合う様な状況ではなく、どんどん防空壕の穴から堤防の中へ水があふれ出ていきました。

そのうちに堤防のまわりの砂混じりの土が徐々に崩れていき、「もうこれでは駄目だ。早く家に帰って家財を床上に上げよう。」ということになり夢中で走って帰りました。午後3時頃だと思います。家のじいさんが、「家のひさしまで水がこなければ大丈夫だ。」ということで、私たちはその言葉に従って、2階へ上がりました。庇まで水が来なければ家は流されないというのは、じいさんが楽観視していて、風呂の水のように水面がせり上がった状態なら大丈夫でしょうが、天竜川の水の流れではとても耐えられる様な状況ではありません。

命がけの避難

しばらくして、裏で叫ぶ声がするので2階からのぞいてみると、黒っぽい水が流れており、新家の家族がうちの北側の門口まで逃げて来て、流れを渡ろうとしていました。普通なら家と北側の家との間は道路になっていたのですが、それがもう急流になって渡れるような状態ではなく困っていました。そこで北側の家の細葉囲い（槙の木の生垣のこと）との間にロープを繋ぎ、手をとって1人ずつ私たちの家の方へ渡し、家の蔵に避難させました。少しおいて、東側の新家の磯部久平さん家族8人も逃げてきて、家の2階に上がりました。

その頃、北側の新家の母屋が上（北）に向かって流れ始め、しばらくおいて東の久平さんの新家も南に向かって流れ始めました。私の家のまわりには北側の新屋、東の新屋、それから西側の家を含めて4軒が集まっており、堤防の近くには磯部茂栄さん（磯部耕平さん）の家があり、私の家から東側の家が皆流されてしまいました。さえぎるものが無くなった堤防の方を見たら、切れ所が真っ直ぐな通りの先に見えました。あの状況を見たら、それこそ背筋が寒くなる状況でした。滝のような逆落としのように、流材などが流れて込んで来て、その流材やゴミが、私の家の細葉囲いに引っかかり、囲いの外側と屋敷側の内側との間に約4尺（約1.2m）くらいの水位差ができていました。しかしこれも時間にして10分そこそこ、一挙に細葉囲いを壊して家の内側に流れ込んできました。

今年の鬼怒川の水害を見て思い出しましたが、鬼怒川の濁流の流れは強かったですが、我々が当時遭った天竜川の洪水は、水に加えて流材が川面いっぱいになって流れている状態で、ものすごく破壊力があり、当時家を守っていた細葉囲いは直径5、6寸（約16cm）位の年代物の囲いでしたが、あっけなく流されてしまいました。

ものすごい音をたてて私の家はひっくり返り、私はその大音響ではじかれたように、夢中で階段を2階から駆け降りました。私の家と西裏の家の間は下飯田用水になっており、用水はすでに急流になって、とても女性や子供が渡れるような状態ではありませんでした。私は家の西裏から飛び出して流れの中へ飛び込みました。私と後ろから付いてきた弟の達雄と東側の家の貞俊、英夫さん兄弟の4人は泳ぎができたので、用水を渡り、細葉囲いを伝って金光教会（金光教金折教会）まで逃げることができました。当時の家屋はほとんど細葉囲いでつながっていたため、それを伝って逃げることができました。最近の住宅には無く、逃げる手段がありません。そういった面では細葉囲いの存在は幸いでした。

午後5時半頃には日が落ちて暗くなってきました。その頃はまだ私の家は金光教会から見ることができ、傾いていても残っているのがかすかに見えました。まわりから、濁流の音に消されながらも「オーイ、オーイ」と助けを求める声が聞こえましたが、これはもうどうすることもできない状態でした。その夜は、不安と焦燥ですごした長い夜でした。

「子供を頼む」

暗くて長い夜がやっと明けた次の朝、私の家の屋敷の跡には、水草が絡まった細葉囲いが少し残り、私の家だと確認できたのは、数本の柱と傾いた屋根だけでした。この残った数本の柱を濁流が洗っていました。流れの影になる東北の隅に細葉囲いが少し残っていて、そこに姉の芳子と西の家の長女静子さんが木につかまっていて助かりました。さらに東の久平さんが蔵と一緒に流されましたが、近くの松の枝につかまって助かりました。荒れ狂う濁流の中に、根こそぎになった流木がひっかかり、流れが複雑に変わっていましたが、そこへ小舟で乗り込んでいき、よく助けに行ってくれたと思いました。救助の方達も、出るときには「今、出て行ったらお前ら死んでしまうぞ。」と言われたことを後に聞きました。その時助けに出てくれたのが、天竜川で鍛えたベテランの船頭さん達で、小島八重吉さん、青島小三郎さん、青島愛治さんでした。その青島小三郎さんの息子さんが本日一緒におります青島達郎さんです。

私の爺さんも細葉囲い伝いに逃げて、金光教会のすぐ近くの宮崎雪雄さんの納屋の天上裏に避難していました。西側の家（磯部仲平氏）の清さんが息子の俊之さんを肩車に乗せて逃げてきました。早速手を出して俊之さんを引き上げ、次に清さんに手を出して助けようとしたところ、清さんは「子供を頼む」と一言残して濁流に呑まれそのまま流されていきました。

私は翌日、迎えの舟で叔父さんの所へ行きました。叔父さんのところも爆撃で母屋が焼かれて仮住まいでありましたがそこへ入り、次の日親父も来て合流ができました。親父は職場にいて、洪水当日は家に帰ることができず、その次の日に泳いで行けるところまでたどりついて、私たちと合流したのです。

4日目には、私の弟の毅が金折の野山にいて、その西側の松林山から1人でふらふらになって出てきたところを通りかかった舟に助けられてきました。「野山」とは当時の土葬墓地のこ